

■ 清流劇場「アンドラ」

周囲から偏見の眼差しで接せられると、人はこんなにも変わってしまう。清流劇場が、スイス人作家、M・フリッシユ作「アンドラ」を上演（7日、大阪市の一心寺シアター倶楽で所見、田中孝弥構成・演出）。差別意識を構造化し、実感として伝わる寓意劇。

舞台は架空の小国・アンドラ。青年アンドリ（高口真吾）は、ユダヤ人として差別される。実は、アンドラ人の教師（西田政彦）と「黒い国」（ナチス・ドイツを連想させる）と呼ばれる隣国の女性の間でできた子。清廉潔白とされる教師が、黒い国の女性との関係発覚を恐れ、「ユダヤ人の子供を救い、養子にした」という美談を作り上げたのだ。アンドリの実母が殺され、

偏見が生む悲劇 訴える

彼は濡れ衣を着せられる。また出生の秘密を知るが、受容できず、偏見に満ちた社会にも絶望。進駐した黒い国の兵士に、ユダヤ人として虐殺される。

偶像（イメージ）が生み出す悲劇。純朴な若者が、人々から臆病、拝金主義など、様々なユダヤ人像を押し付けられるうち、自分は本当にそんな人間と思いつく。高口真吾は、心の負荷が増すにつれ、顔付きまで変貌する心理の推移を、精確に演じた。

白で統一された舞台。平和な理想の国と、国民が自負するアンドラを象徴する、純潔の色。だが、時折舞う銀の花吹雪が破壊を暗示する。

反ユダヤ主義者が作り上げたユダヤ人のイメージ。それがホロコーストにつながる。人種差別の不当性を描くとともに、思い込みによる歪な日常会話を展開し、身近ないじめの構造も想起させる。さらに、他国を先入観で解釈することが、戦争の火種になる危険性も暗喩。偶像を破る大切さを現代社会に訴えかけた。

（大阪芸大短期大学部准教授



青年アンドリ（高口真吾）はユダヤ人への偏見で追い詰められていく